

アトピー性皮膚炎の謎

皮膚科



アトピー性皮膚炎の原因遺伝子は長い間不明でした。

複数の原因がある疾患と考えられ、定期通院中の方の多くは主としてステロイド・タクロリムス軟膏による外用療法を行っています。しかし保湿の重要性を理解し、適切な方法で実践している方はまだ少ないように感じます。そこで、「なぜ保湿が重要か」の理解を深めるために原因の1つとされるフィラグリン遺伝子異常にも触れてお話しします。



フィラグリンは、表皮細胞を凝集して扁平で丈夫な角質細胞に変化（角化）させ、丈夫で保湿力のある角質層を作る働きの中核的役割を担っています。アトピー性皮膚炎には、尋常性魚鱗癬というフィラグリン遺伝子異常による角化異常が合併することがあります。そこで、アトピー性皮膚炎にもフィラグリン遺伝子異常が関係しそうだという以前より予想されていました。そして最近、フィラグリン遺伝子異常が日本人のアトピー性皮膚炎患者の約3割にあることが明らかになってきました。

フィラグリン遺伝子異常によりフィラグリン産生が減ると、角質層が弱く乾燥した状態（ドライスキン）になり皮膚のバリア機能が低下します。そのような皮膚からは様々な物質が容易に入り込みアレルギー反応が獲得（経皮感作）され、アトピー性皮膚炎を発症するという仮説が立てられました。そして、人工的にドライスキン状態を作りダニ抗原を繰り返し塗布すると、アトピー性皮膚炎に類似した病態が生じることが動物実験で証明されました。また気管支喘息や食物アレルギーにおいても、経皮感作が重要な役割を果たすことが注目され始めました。

現在、フィラグリンの産生を助ける薬剤の開発が始まっています。将来的には、フィラグリン関連のドライスキンが原因とされるアトピー性皮膚炎（アトピー性皮膚炎の3割以上）を内服薬でコントロールできるようになることが期待されます。しかし、現時点ではドライスキンに対する治療の選択肢は、保湿剤を外用する方法しかありません。ですから、ステロイド・タクロリムス軟膏による外用療法とともに、皮膚のバリア機能を正常化させるための適切な保湿を実践していただきたいのです。

日本皮膚科学会認定皮膚科専門医
むとう みか

武藤 美香

多摩ニュータウンタイムズ掲載記事 2011.3



多摩ガーデンクリニック

皮膚科・小児科

東京都多摩市落合1-35
ライオンズ多摩センター3F
<http://www.tama-garden.com/>

予約・お問い合わせ

042-357-3671

※皮膚科と小児科では診療時間及び受付時間が異なります。詳しくは受付・電話にてご確認ください。

携帯サイト

